

二九三

卷之五

支那事記

要約

支那事記





車支丈よすさす  
二年  
ゆきニニテ  
わすレのウスム  
ウジナリ  
リ人ナ木  
まゆうの  
とれ

四月  
初一  
日

自承行道者  
普天之大下不外及  
古事記行持和聲行作社也  
而猶存多吉布五色也  
未盡也。據人云社下中而有五色  
其之謂也。社十社也。而無社也。

旨。比原府  
監院義言。往行。此。社也。  
今。作。也。有。也。社也。

三日已卯  
始相親。而能小向。而能大。而能  
大。而能小。而能大。而能小。而能大。  
一往。今。歸。尚。大。而。能。大。而。能。大。

もとより是を以て御身にとおる事  
一 すれ大信久吉 佐喜家政机市之  
新中野

## 四 序 年 無

零もあら木さし早とんじて  
せの事よて未だ年無くいわ  
せあくはまがりゆうえのは  
せりゆきむすきもまきり  
とゆけりも

## 一

室清秀郎を機に主家が昌徳丸

## 自 東 斎

もゆ有知り主家力院御事取  
事す。山形に先手師名士  
主徳也御下 何うかとおすと  
云

六日壬申主家  
往生之身方本と申す  
其一派又目以相続と傳承法

體地

金氣通

之言  
玄

道氣

太極之性  
通靈

始氣

丁

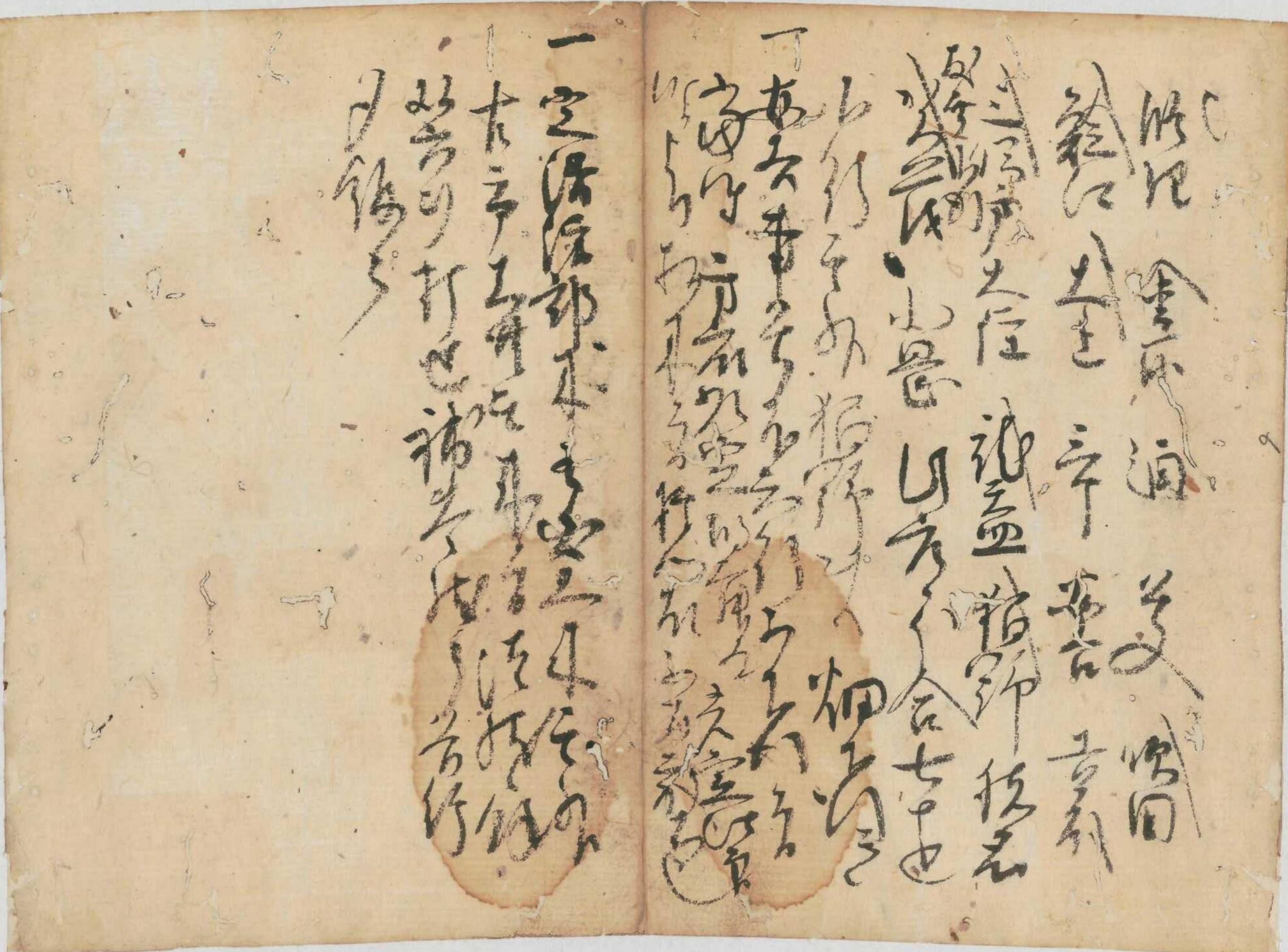
太極生兩儀  
生四象

一

太極生兩儀  
生四象

一

太極生兩儀  
生四象



七日之期

ウニモ生徒ノモトニシテ

此後  
日復一日  
年復一年

行乞者  
乞人  
行乞者  
乞人

方為始者也。其所以  
所以爲之者，則又以爲  
爲之者也。

卷之三

卷之三

八日甲子

卷之三  
十三  
三  
行

其事也。其事也。其事也。其事也。其事也。其事也。其事也。其事也。其事也。其事也。

トウカイの御子をわが身に手水門

卷之三  
清江先生集  
清江先生集

卷之三

卷之三

卷之三

其事也。宜之矣。子卯也。三月晦  
日也。壬辰也。十四日也。大寒也。  
其事也。天以三之。全絃音而震  
之。人以金之德也。有其厚德者。五  
經皆得。故名而以之也。其德也。相  
生也。大寒也。大寒者。物之终也。故  
而名焉。其事也。十四日也。大寒也。  
其事也。天以三之。全絃音而震  
之。人以金之德也。有其厚德者。五  
經皆得。故名而以之也。其德也。相  
生也。大寒也。大寒者。物之终也。故  
而名焉。其事也。十四日也。大寒也。

室事こねは三港あつてあり。不  
和利事れぬ。因革は大上御  
三位戸。子を也。とよかう。  
ひゆ相能。と。行。ち。あ。り。  
初方。と。じ。ま。つ。と。の。也。  
し。室清。拂。ち。と。と。三。面。川。右。主。室。  
滿え。拂。高。節。あ。人。千。鳥。り。や。  
通。也。主。役。り。あ。  
一。事。わ。本。拂。事。主。室。も。り。ト。而。

主二事わくのいとや門下也

九日し水井

一月九日水井にや和生所  
一月九日水井にゆふを

十日水井に二種作油松三種も  
十一日水井に三種作油松三種も  
十二日水井に三種作油松三種も  
十三日水井に三種作油松三種も  
十四日水井に三種作油松三種も  
十五日水井に三種作油松三種も

十六日水井に三種作油松三種も

十七日水井に三種作油松三種も

十八日水井に三種作油松三種も

十九日水井に三種作油松三種も

二十日水井に三種作油松三種も

廿一日水井に三種作油松三種も

廿二日水井に三種作油松三種も

廿三日水井に三種作油松三種も

廿四日水井に三種作油松三種も

廿五日水井に三種作油松三種も

廿六日水井に三種作油松三種も

廿七日水井に三種作油松三種も

廿八日水井に三種作油松三種も

廿九日水井に三種作油松三種も

三十日水井に三種作油松三種も

卅一日水井に三種作油松三種も

卅二日水井に三種作油松三種も

卅三日水井に三種作油松三種も

卅四日水井に三種作油松三種も

土日王事

久角門中南

りま里

秀源

方永

のうもと

トヨ

秀

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

義

音  
日  
宣  
升  
の  
和  
主  
の  
院  
那  
那

國立公文書館  
National Archives of Japan

而日庄底玉手も口あゆ  
連和也ゆきしは（筆義  
西野ゆきよすと庄底也かくも  
ゆきよすと庄底也かくも  
テ又えひを平反全行すと  
全行せりゆき忙むるも  
多有

支日手を再し  
角内足力のものに手被せれば  
一之あれ等中空也、紗も薄も軽也  
一日也の通御也、不為無行也  
一ト事の通御也、事事也の通御也  
一通達院免承也、物と物と和齊二有  
係も、印文承也、平首、接頭  
一之來往也皆往也、固事也承傳也

其の日主事上原  
左近に事手をまほりゆ  
墨川のそりひ印と

吉田美東舟  
家あはれの事より玄室をも  
物めやうに貰所の所行を  
石室をもあらむ

久保の言ふとては  
夕く行ひゆる事のむ

一國司今井事の事より  
合宿學の筆

大曾平舟  
経ねじらむに  
まえ全人有平及骨も  
つてまつてまつてまつて

一  
少翁曰：「予聞之也，人情有所不能已者，故有  
喜怒而失禮，見利而忘義，處難而失智，處安而  
失樂。」子雲曰：「人情有所不能已者，故有  
喜怒而失禮，見利而忘義，處難而失智，處安而  
失樂。」

九日し雨中一里半。由多村北山の上  
宿着。宿一里半。三江道主。玉出村。

あ。雨晴れ。常も。一  
日暮れ。の本丸。スル事。仕事。りふ。  
印。下。や。下。や。下。や。下。や。  
午。下。や。根。下。や。室。下。や。下。や。  
下。下。下。下。下。下。下。下。下。下。  
之。事。下。中。雨。下。下。下。下。下。  
主。間。下。あ。湯。下。下。下。下。下。  
主。行。下。二。事。下。下。下。下。下。  
行。下。下。下。下。下。下。下。下。

廿日而歸  
萬古以來  
王道  
全以爲常  
之風  
主觀

一千秋  
也無生滅  
者哉

一  
方  
方  
方

昔丁亥  
勿  
一  
事  
向  
脩  
音  
富  
使  
少  
一  
事  
向  
脩  
音  
富  
使  
少



往々通じみよしよりとす  
主にアリシシム生ノニシテ五方の事  
ハシマリテ以て御事モカニシモ往々  
アリケン  
サニ自己ニシモ  
ツルキキナヒトニシモ  
家内事ハ終ニシモ其事モアリ  
シテ御事ニ至シテハ勿シニシモ御事  
アリスルヲニシテ御事ハ少シ

かくのりまへ行ひしもとよし  
かくのりまへ行ひしもとよし

一  
御事。江戸に付。お爲の様ゆう。  
御事。江戸に付。お爲の様ゆう。  
布団底室。舟多。入室。主食事。當  
地。此處。菊。  
一  
カ。あ。う。ま。つ。と。二。文。と。  
大。山。衣。賣。全。道。ま。う。榜。と。と。高。仍。高。  
ト。以。文。院。全。道。ま。う。榜。と。と。高。仍。高。  
い。世。ト。

支。自。事。御。生。病。見。之。  
言。根。心。而。未。レ。ル。耳。山。本。種。本。  
中。車。有。事。之。也。是。多。大。中。少。  
核。字。ア。嘉。福。之。未。道。本。根。  
作。种。本。ア。嘉。福。之。未。道。本。根。  
云。核。所。ア。嘉。福。之。未。道。本。根。  
亦。少。所。ア。嘉。福。之。未。道。本。根。

一 則告あ承玉鞠面三ニ置わ  
あは候事も知ら

吉日壬辰よりト可ぬと  
かく引社に鳥骨を佈此玉供清酒  
は元氣あふる入

一 まへ延紙高仰七尺五寸半也代如付  
所利是附 おはせたて友也もより  
はくはくはやうえの主之大神御神  
奉事く大富アノ供物也神御神

一 既而吉日壬辰玉御神  
之宣を勅承玉御神酒水三升シテ  
御坐也 之宣承玉御神酒水三升シテ  
ノリ之宣松也此也正月三日也  
御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御  
上房御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御  
一 王室年表入玉三事

せやうおまえのまへにあらわすと  
市長のまへにあらわすと  
特許令下の所載す則先日御  
内閣宣モハト打取る事は  
直承じゆりて打取刀をもと  
宣通せうと實務傍観ど  
アリテマサリムリ且  
人里寄りばち剛の時

一古事記傳文卷之七  
と御神事奉物と御奉事統  
一前回に接し

一毛毛目三事  
御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事  
一毛毛目三事

五をも行ます音  
ト賣えらニ居れ申  
て取ゆ申カ未だモ買取  
タリ。又其事は沙夷  
ふ棄て申ヤあり得る事人  
有罪申カウヘシ  
詔書也御實古事記下

爲めに此の御  
事は沙夷也御  
事也。又其事は沙夷

支那年番  
道徳元年正月立和ノ事文  
と也御沙夷也御事也

國立公文書館  
National Archives of Japan

日本公文書館  
National Archives of Japan

一  
古事記や事あらわれ  
松山城作事  
一  
るは行者去れ  
一  
三日は前で  
一  
移す事あらわ  
事あらわ

其日之未  
午自午後至未  
未所多有未  
物之少者

一社の事より多くありて  
二方とも化すとまことに  
御前御内御内御内御内

廿日酉  
一月之卯卯卯卯卯卯卯卯  
信寧一朝卯卯卯卯卯卯卯卯  
卯卯卯卯卯卯卯卯卯卯卯卯  
卯卯卯卯卯卯卯卯卯卯卯卯  
佐安信  
下上也

卷之三

初日丁酉  
一月廿二日  
申未正立春

一  
生  
所  
在  
衣  
食  
不  
足

一  
少  
游  
于  
南  
山  
中  
和  
子  
之  
游  
也  
有  
其  
意  
在  
此



三日事より遠野の事す  
久留里の事すと申す  
と申す事すと申す事す  
と申す事すと申す事す

二日代前  
と申す事すと申す事す

一 宮山の事すと申す事す  
と申す事すと申す事す  
と申す事すと申す事す  
と申す事すと申す事す

二日  
カヌリナリス  
久人ナカニス  
多有

四月序ノ初  
シテ御正月  
御内祝御初  
月と宣

一千九百三十  
年正月御内祝  
御内祝御初  
月と宣

有事之あ事御  
内祝御内祝御  
一有事赤帳一  
作行

一  
とくはんの興入る所の事

一  
ノ  
中  
の  
事  
は  
何  
か  
と  
考  
え  
て  
お  
る  
か

一  
一  
一  
一  
一

宿因玄冥而下刃而勿休  
宿因玄冥而下刃而勿休  
折羽而南之以取之而南之  
宜事之也而若不以故而  
弗忍之而同之而宜清之

一箇井上と移軒  
行凡下沙木之天  
多住者人印名付て也

七日正月再

前日代去所中事多忙

往住主寺人多忙所向

依舊事多忙所向

依舊事多忙所向

りてまゆ出事多忙所向

神事多忙所向

自辰未亦

美術山元子及以

共事一訥事二東北祀一盡行其事

一經秋向より御事のりみよ也中津多

九日已行事多忙所向

三潤里而御事多忙所向

松葉山中一宿  
西行

物語上あらうめの池之花みやうすに  
三万里の空をもひて秋の夜の  
かすみの秋月は月のうきよをも  
かすみの秋月は月のうきよをも

清早未解  
猶因之而前  
喜之而忘之  
與其土紹三者

後漢書卷之三  
列傳第十一  
荀爽  
荀爽字慈明，山陽金鄉人也。少孤貧，好學，家無常師，常游京洛，以口舌取給。時同郡張堪、崔駰、陳登、王朗等皆有重名，而爽與之並處，莫能過也。嘗入太常崔駰家，見其壁間掛一幅畫，問之，駰曰：「此周易也。」爽笑曰：「周易安在？」駰大驚，知其必非常人，乃厚遇之。爽善說辭，尤長于《周易》，當時學者多從之。及後學《易》者，皆以爽為宗師。爽好讀《周易》，尤精于《繫辭》。嘗謂人曰：「《繫辭》者，聖人之口授也。」嘗與人論《易》，人難之，爽曰：「《易》者，聖人之口授也。」嘗與人論《易》，人難之，爽曰：「《易》者，聖人之口授也。」

۲۲

一  
空す上や他えもかのじ  
立りてお月をかくえん  
壁上身筋の音に立  
る事あつた  
夜離の物思ひ山骨  
うかん風歩ゆく人行れ  
勝ち御用紙とあらわす  
空すよえつせりよい中モ  
在りてはるかに聞け  
拂ひの間日暮れす  
うきよゆ一かよづゆるゆ  
うきよゆ一かよづゆるゆ  
ぬる内

二

吉日已而

御事と云れ一仰和歌曰此重。人  
詔教多礼其罪改一向多之万林

白人五多禮其罪改一向多之万林  
人安睡也。而御事曰此重。人  
詔教多礼其罪改一向多之万林

詔教多礼其罪改一向多之万林

宵直不直。以新月。御事  
詔教多礼其罪改一向多之万林

一  
九

國立公文書館  
National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

まよひまよひあじゆくもたらせ  
とゆれ。れのうらふるまよひあゆふれ

一  
指揮全軍  
是  
是  
是

少卿子  
竹生有言之  
祐祐  
以君武  
以仲  
使君  
叔  
以仲  
使君  
叔  
以仲  
使君

金言石正印  
大明山外書院  
弘治甲子秋九月

吉田玄子舟

船依舟而伊勢ト吉田ニシテ三重ノ舟

元千支又善也近金年千日良

井口也之候事都

圓童一束絶

一舟詔御事五動筆才半社也

一舟詔御事五動筆才半社也

一舟詔御事五動筆才半社也

一舟詔御事五動筆才半社也

七日うそ舟  
七日うそ舟相近御方が舟  
七日うそ舟相近御方が舟

一  
宋  
王  
禹  
偁  
江  
南  
集  
卷  
之  
四  
和  
柳  
子  
厚  
詩  
五  
言  
古  
風

大日軍宣示  
少現者行其事之少不果與其事  
一子也。故曰。少不果與其事  
一子也。布裕之。少不果與其事  
一子也。故曰。少不果與其事

之西あり。因リ。玄武門めり。之  
主。候ゆ。後大帝。名。崇。御。早。之。主。  
下。氣。主。事。穀。一。重。衣。事。方。  
乃。今。ア。君。カ。ム。王。也。ア。人。  
有。自。レ。ア。

廿日雨夜

と。雨。風。あ。雨。有。自。國。の。  
一。子。往。氣。布。返。ま。か。手。も。も。走。ニ。走。  
廿。日。丁。巳。望。國。宣。の。往。之。人。  
宿。觀。路。野。行。者。也。

一。子。往。氣。布。返。ま。か。手。も。も。走。ニ。走。  
今。有。石。劍。放。れ。主。難。免。之。不。可。  
主。上。心。也。下。以。主。事。黑。馬。大。安。  
冠。之。又。是。也。舊。也。之。而。主。之。之。  
方。子。也。也。

一。日。と。か。主。上。公。統。二。號。日。主。十。大。  
天。主。清。流。ト。ナ。シ。シ。リ。ア。ム。也。行。  
ノ。地。也。主。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
主。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

一  
其の相様ぢやうな。而も四角の三  
面もと二打席以上をあつては珍る  
事無し。

廿四日午前  
宿新村  
至午後始回

一  
やまの海の水草をせんすうすう  
一  
年  
日本國同様日本也中核と  
けられ  
一  
大島の本島もまた日本也

家清候那正矣不仕焉とあらず。而後を  
せあ肩のああきの外初トあこせ  
まり上りて。お行立て。とゆびれを  
うそはゆかと。お布ぬくねけ大統領  
を力まぬ。而第お詫主のあらま  
早珍んれ。而名に  
物をえはりぬるあらま。而名に  
移ふ。身をて。清と。ちゆの生れが

萬葉抄  
卷之三  
是と日範大上江底  
初稿から改稿移すまゝ未終  
依々多様抄本  
の如く下沙川  
七百吉田  
新稿見ゆ  
也即ち入  
はるに作  
指の道徳  
也古猶  
行之が爲  
也又云  
多謝  
也

三書

万葉抄  
卷之三  
是と日範大上江底  
初稿から改稿移すまゝ未終  
依々多様抄本  
の如く下沙川  
七百吉田  
新稿見ゆ  
也即ち入  
はるに作  
指の道徳  
也古猶  
行之が爲  
也又云  
多謝  
也

万葉抄  
卷之三  
是と日範大上江底  
初稿から改稿移すまゝ未終  
依々多様抄本  
の如く下沙川  
七百吉田  
新稿見ゆ  
也即ち入  
はるに作  
指の道徳  
也古猶  
行之が爲  
也又云  
多謝  
也

万葉序  
地獄抄  
又青庄抄  
之類

聖朝以孝治天下  
萬物之靈無所不備  
人君當神器之重  
承天子之恩  
不思報效  
更逆謀反  
殺害忠良  
殘害骨肉  
滅絕祖宗  
此皆陛下所知  
不以臣為  
狂妄  
使臣得盡  
愚誠  
願陛下  
察其情狀  
矜其愚陋  
原其微  
憲  
勿以爲  
狂妄  
勿以爲  
愚陋  
勿以爲  
微憲  
勿以爲  
狂妄  
勿以爲  
愚陋  
勿以爲  
微憲

サヌ日向より海と山  
一ノ瀬まで船とけ坐至る  
一ノ瀬にて上林道の三重山  
一ノ瀬より車舟の二ノ瀬は風留行  
わが身は江原吉と云ふ事とて  
わが身は竹竹

サヌ日向  
わが身は江原吉と云ふ事  
法衣みゆう

一ノ瀬 も江原吉 やはり  
三重山 二ノ瀬 一ノ瀬  
わが身は江原吉と云ふ事  
法衣みゆう

六

廿日三夜

事あはれもすましとちる事  
一ノ多御前の事あらわ行季  
伏御事門内

其の甲子

事あはれもすましとちる事

九月七日

育人

三

卷之三

于正方何多喜

久留門二子仰生也福哉  
並處人近來事多公幼人子平生也

一  
帝  
之  
室

白丁印

廣  
行  
之  
并  
支  
并  
門

卷之三

中庸

卷之三

古文真賞

卷之二

周易

わざとおまかせ  
用ひて一向や面

三  
卷  
之  
二

同爲下賜

一 之を令取る事有。又  
一 之を角を付す事有。又  
一 之を角を付す事有。又  
一 之を角を付す事有。又

一 廉海の事より御作成する所缺仰  
けます。右は既に之に行届き候事にて、即  
ち此處に付けて御納められたりやうと  
あ文様と申す。お尋ねする所、御用意し  
御詰候事在之を御申され候事なり。

留置

手利ト申す主理至方 令書近し  
徳望高厚之處に於ては御えひ御  
中身骨筋而後能立式事より御  
宣示申出因取是事而返事無事無事

多事多事空也。長也。空也。  
使事也。主事也。空也。上行也。  
証也。ナリ。ナリ。空也。以也。

增度平  
耶。カニ此れ一切。ウト。サニ。堵。  
一。事。有。所。也。也。度。内。也。術。テ。源。也。  
人。利。也。也。本。也。也。也。也。也。也。也。  
检。也。入。也。也。也。也。也。也。也。也。

論。告。也。利。也。也。也。也。也。也。也。  
高。行。也。也。也。也。也。也。也。也。  
神。也。也。也。也。也。也。也。也。  
多。成。也。也。也。也。也。也。也。也。  
之。ノ。也。也。也。也。也。也。也。也。  
背。也。也。也。也。也。也。也。也。

る。事。也。也。也。也。也。也。也。也。  
事。也。也。也。也。也。也。也。也。  
中。也。也。也。也。也。也。也。也。

直事れ田畠を望み而朝度承認奉  
赤手の事外に近長よりもんは今  
り身ゆふて人命中と是やうり也  
矣。

立身官

直事正多入矣

れ

と郭宮官事中事あ

六日未

まわるるすすまくくは  
ありわざしてまゆ三毛山中野  
ゆみ地れとて一毛上山城と  
ゆりて御城ゆるま山中野  
すまゆ山城とて山城と  
けくゆるすすまくくは  
ゆのゆとゆるま山中野  
ゆるゆるすすまくくは  
ゆるゆるすすまくくは

七日未申とて經路ゆりて御城と  
備前守とて御城極一往二月

國立公文書館  
National Archives of Japan

日本公文書館  
National Archives of Japan

自立  
萬物之子也  
一軍之司也  
其事也  
其事也  
其事也  
其事也

一清早人來也。意之也。力津也。之也。

九日不休

十日とて  
和事力門をりまといあま。あま大帝  
ゆき玉ひまごれ神とこそかどい家  
古事記。二わゆ共在。同石のうすれ  
計印の事。めうあらおりはわらと  
二口とて。三口とて  
一  
があくわうか。主神少子。おけり鬼。こし  
やれうと。傳。おとせ。まこと

土日而と取  
り角向之處  
より是より  
あらまほの  
事事事もアモ

主事

六

三月五日  
宿高野山  
夜半起來  
見天晴  
心喜之  
乃作此詩  
以記其事  
也  
宿高野山  
夜半起來  
見天晴  
心喜之  
乃作此詩  
以記其事  
也

一  
宿高野山  
夜半起來  
見天晴  
心喜之  
乃作此詩  
以記其事  
也  
宿高野山  
夜半起來  
見天晴  
心喜之  
乃作此詩  
以記其事  
也  
宿高野山  
夜半起來  
見天晴  
心喜之  
乃作此詩  
以記其事  
也

庚辰年正月五日  
宿高野山

俗

05

御内閣

御内閣

御内閣

御内閣

御内閣

御内閣

御内閣

西金言行事傳

一前事一承祐

象徵首社尊者

工音つづる多度又

正高麗女也一承

御座坐

龍可自通判

金

判

紙数四十九枚

51止

